

市民研 news 5



People's Institute of Environment

市民環境研究所

新しい活動の場をめざして

代表理事 石田紀郎

当NPO法人は、4年前に京都市左京区の片隅にまず任意団体として出発し、半年後に法人格を取得しました。設立総会から数えて4回目の総会を2007年6月に開催するまでになりました。あつという間の時間経過であり、その間に何ができたかと自慢するほどのものもなく、代表理事としては、市民環境研究所を支えてくださっている皆様に申し訳なく思っています。それでも、決して大きくはないが、現代社会での重要な活動を続けている団体の運動を支える場として、また、「環境塾」を通じて多くの問題提起をし続ける場となりえたのではないかと考えております。

本市民研ニュース第1号に、当法人の理事の一人であり、使い捨て時代を考える会の樋田さんが、「市民運動は発展的に広がっているのだろうか。環境問題は多くの市民に受け止められるように見受けられる中で、運動としての発展はあるのだろうか。そして、現実はある解決に向かっていっているのだろうか。」

……時流に合わせることによって運動が拡大するのであれば悲しいことである」と書いておられます。「環境」や「持続可能な」の接頭語を冠に付せば善人と思われる風潮だけは出来上がりましたが、議論は浅薄となってはいないでしょうか。そのような風潮に対して、市民研は十分に批判できる活動を展開してきたか。総会を機に、会員諸氏からのきびしい批判と叱責と問題提起をお願いします。

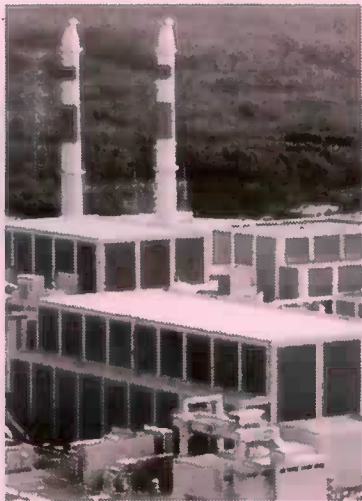
この1年間、代表理事である筆者は京都学園大学バイオ環境学部専任教員として働きたため、市民研に常駐することが不可能となりました。大学の勤務を終えて当事務所に出勤するのは夕刻からと土曜日のみ。事務所に灯りが灯っていたからと先日も数人が訪問してくれました。常駐者がいない事務所はどうしても活気が低下します。もちろん筆者が不在時でも、事務局員や会員の方々が事務所を活用してくれているので存在意義は十分にあるのですが、よ

り一層の活性化のために、事務所を市民運動の活動拠点として共同利用してくれる団体・個人を募集したいと思っています。

また、これまで法人内に法人財政とは独立したプロジェクトを立ち上げたいと模索してきました。その結果、地球環境基金の助成を受けて、中央アジアの消滅しつつあるアラル海の旧湖底に防砂林を形成させる植林活動「アラルの森プロジェクト」を立ち上げることができました。広大な旧湖底砂漠に堆積した塩と砂は周辺住民の健康と生活を蝕んでいます。その被害を軽減する植林活動を当法人の活動に取り入れることができました。今年も助成金が決定しましたので、個人や団体からの寄付も求め、少しでも植林規模拡大の活動を展開したいと願っています。もちろん、NPO法人としてはこのような独立プロジェクトをいくつも立ち上げられる実力を今後も求め続けていきますので、幅広いご支援をお願いいたします。

頻発する原発事故と地球環境問題

小林圭二 (元京都大学原子炉実験所講師)



1 志賀原発1号で 暴走事故が起っていた!

今年3月15日、青天霹靂のニュースが飛び入ってきました。8年前、北陸電力志賀原発1号で、「臨界事故」が起っていたというのです。原発停止中、作業のわずかなミスによって、制御棒の一部が、勝手に抜けてしまったためでした。事故は、今まで国にも一般市民にも隠されていたのです。これをきっかけに、他の電力会社でも制御棒が勝手に抜ける事故のあったことが、次々明らかになりました。その数は10件にのぼります。

原発に事故が起これば、直ちに国の規制当局に連絡され、マスコミに公表されることになっています。しかし、10件ともすべて隠されてきました。なぜでしょうか。

今回の臨界事故に対して、国や学者など原子力推進勢力は、「原発はもともと臨界にするための装置だから、臨界になって当たり前

と開き直っています。それは大きな間違いです。今回の臨界事故は、わずか2秒の間で出力が1500万倍になるという暴走事故でした。原発を運転しているときのような一定の出力に制御された臨界ではありません。もっとひどければ、チェルノブイリ原発のような核爆発を起こし、大量の死の灰がばらまかれ大勢が放射線被曝で死ぬような大災害になったかもしれません。電力各社は、制御棒が勝手に抜けると暴走につながり、極めて重大な事態になることを知っていたからこそ、その事態の前に立ちすくみ、公表を逡巡して隠したのです。実際、10件の事故を具体的に分析すると、今回の事故がこの程度で済んだことは単なる偶然で、実に幸運だったことがわかりました。

2 事故調査が不十分のまま 運転再開を急ぐ政府

わずかなミスが重大な事故につながり、同じ事故が、広く電力会社をまたがって起っていたことを考えると、装置自体に根本的欠陥があることは明らかです。しかし、調査した原子力安全・保安院は、事故は操作ミスで起こったことで、装置に欠陥はないと結論し、責任をミスをした作業員だけに負わせ、会社や幹部を事実上免責にしました。事故調査も、通常は半年から1年かけて行うところ、北陸電力の報告書がわずか半月後に出され、その約半月後には、原子力安全・保安院の最終調査報告書が出されて北陸電力の報告書を追認

するなど、極めて異常な速さで終わりました。拙速は現政権のお家芸ですが、事故が十分解明されないまま急がせた背景には、国民が事故の重大さに気づかないうちに事を前に進め、停滞していた原子力政策を、石油高騰と地球環境問題で吹く追い風に遅れず乗せようとする推進側の焦りが見えます。

3 原発は石油の代わりにならない

しかし、原発は、石油高騰時の救い主になるのでしょうか。

エネルギー源としての原子力の致命的欠陥は、電力にしかならないことです。その電力は、日本の最終エネルギー消費分野でわずか22% (2002年度) を占めるに過ぎません。

一方、電力のすべてを原子力でまかなうことはできません。それは、原発は安全上の理由から、需要に合わせて出力を調整できないからです。電力の需要は、昼と夜とでは2倍以上の差があります。季節でも約1.5倍の違いがあります。出力調整できない原発は、この大きな変動のうち、昼夜、季節で変動しない部分だけしか担えません。その結果、原子力は全エネルギー消費のなかで、わずか12.4%しか寄与していないのです。エネルギー問題というすぐに原子力が話題に上りますが、実は、原子力はエネルギー源のなかではいたってマイナーな存在でしかないのです。

一方、石油はあらゆるエネルギー需要に応えられます。原子力



が石油の代わりになり得ないことは明らかでしょう。その上、原子力は石油がなければ成り立ちません。原発の建設、ウラン鉱山の採掘に始まる燃料調達、廃炉、放射性廃棄物の処理・処分など、すべての段階で石油が欠かせません。

4 原発の推進は

地球温暖化対策に逆行する

大気中炭酸ガス濃度の増大によって、地球が温暖化していると言われ、その弊害が様々に予想されています。しかし、たとえその通りだとしても、私は、炭酸ガスが悪いのだとは思いません。地球温暖化の根本的な原因はエネルギーの多消費にあります。炭酸ガスの排出量を減らしさえすれば解決される問題ではありません。したがって、エネルギー源として炭酸ガスの排出量の少ないものを選んだところで何の解決にもならないでしょう。

国や原発推進側は、原発は炭酸ガスを出さないから地球温暖化防止に役立つと盛んに宣伝しています。地球温暖化問題にかこつけて原発を推進しようとするのですが、原発も、建設、燃料調達、死の灰の処分、廃炉など各段階で大

量の石油を燃やし炭酸ガスを発生させます。それ以上に、そもそも、炭酸ガス排出量を減らすために原発を推進するという考えは、人が出す最も無害な廃棄物（炭酸ガス）を最も有害な廃棄物（放射性廃棄物）で置き換えようという話に他なりません。本末転倒です。昨年は滋賀県余呉町、今年高知県東洋町の各住民が拒否したように、今後100万年も危険が続く放射性廃棄物の捨て場は、この日本にどこにもないのです。

それどころか、原発の推進は、エネルギー消費をかえって加速することになるでしょう。原発は大規模集中型電力源です。大量の電力の使い道が必要です。その上、先述のように昼夜を問わずフル出力で運転しなければなりません。需要の少ない夜間は、電力が大量に余ってしまいます。その使い道を開拓するために、本来なら不要な電力を無理に使わせる、つまり、電力を無駄使いしてもらわねはなりません。安い深夜電気を使うオール電化住宅、工場の深夜操業、夜も昼並みに動く都会は、電力だけでなく石油の消費も押し上げます。その結果、温暖化を防止しようと思えば何よりもエネルギー消費量の抑制が必要なのに、原発社

会をかえってエネルギー消費量を増やし、ひいては温暖化防止にも逆行しかねません。

5 原子力利用は 核兵器開発につながる

原発の原子炉は、もともと原爆用プルトニウムの製造装置として開発されました。そのプルトニウムを取り出す装置が再処理施設です。そして長崎に落とされ、約10万人が殺害されました。原発の燃料は、天然のウランから燃えるウランを濃縮した濃縮ウランですが、ウラン濃縮施設は原爆用ウランを作るため開発されたものです。そこで作られたウラン型原爆が広島に落とされました。

このように、原子力利用は原爆製造と切っても切れない関係にあります。日本は今や、そのすべての施設を持っており、すでに、北朝鮮が持つプルトニウムの約二千倍も保有しています。原子力を利用することは、そのまま核兵器開発にもつながり、周辺国、ひいては自国の平和を脅かします。エネルギー源だけを語る都合のいい原発推進論に惑わされることなく、原発は止めていく方向へ向かうべきです。

琵琶湖市民大学

琵琶湖市民大学は琵琶湖淀川水系流域のNGO、NPO法人、研究者、大学関係者がゆるやかなネットワークを組んで活動している組織です。流域から琵琶湖を捉えるという視点で、琵琶湖の水質調査および学習会、環境講座の開催を中心に活動を展開しています。参加者が広域であること、研究者が多数参加しており、専門性の高い調査を行っていることが特徴です。

市民大学発足のきっかけは、2003年7月に実施した「20年目の琵琶湖・淀川汚染総合調査」でした。20年目と言っているようにこれには前史があります。1980年代に市民と研究者が琵琶湖・淀川汚染総合調査団を立ち上げ、琵琶湖から淀川までの大々的な広域調査を実施したのでした。そして水道水中のトリハロメタンや広域下水道計画などの問題点を指摘しました。そのメンバーのなかから徐々に調査をやろうという機運が盛り上がり、20年目の調査に至ったのです。目的はこの20年間に行なわれた法整備や琵琶湖総合開発などが琵琶湖の水質にどう影響を与えたかを調べようということでしたが、新進気鋭の研究者であった中心メンバーが定年を迎える歳になり、後継者をしっかりと育てていきたいという裏事情もあったのです。

さて、新たな調査団には20年前



の調査に携わったメンバーに若手研究者や学生が加わり、40人を上回る大所帯で琵琶湖広域調査を繰り広げました。真夏の2泊3日の泊り込み調査で、昼は過酷な労働でしたが、夜は開放されて議論や雑談で盛り上がり、思いがけず世代を超えて交流が深まり、強い絆ができました。この経験が世代を超えて語り合う場を作っていこうという方向性を生み出し、合宿形式の環境講座開講へと進みました。それが琵琶湖市民大学の始まりです。2004年、05年、06年と3年続けて8月に3泊4日の合宿を実施しました。さまざまな世代が一堂に会して寝食をともにし、環境について学び、語り合うというコンセプトで、講義のほか湖上調査実習やワークショップなどを行っています。これまでの参加者は延べ300人以上。リピーターもいる隠れた人気プロジェクトです。

合宿以外の時期には琵琶湖をキーワードにした連続学習会、琵琶湖博物館での学習会、琵琶湖疎水の見学などいろいろな学習会を行っています。しかし、もともと調査団が母体ですから、2003年以

降も小規模ながら調査を続けてきました。2005年～06年には水上バイクの環境影響調査を行い、湖水から揮発性有機化合物が検出されることを明らかにしました。この結果をもとに琵琶湖ルール再検討などの提案をまとめ、滋賀県に報告しました。このような調査活動にもっと力を入れるために、2007年は調査のための準備期間として合宿は一時休止し、情報収集のための現地見学会や地元グループとの交流などを行っています。他に、今冬は極端に積雪が少なかったので、その琵琶湖への影響を調べるという計画ももちあがっています。今やスタッフの中心は20代～30代。世代交代は無事進んだようです。(文責：事務局・山田晴美)

琵琶湖市民大学代表：讃岐田訓

琵琶湖調査団長：石田紀郎

事務局長：中地重晴

事務局所在地：

〒657-0058

神戸市灘区将軍通4-3-15-101

ひょうご環境科学研究所内

TEL&FAX 078-801-7453

<http://hyogokankyolab.com/>

京大植物園を考える会

市民環境研究所にも近い百万遍の交差点を西に歩くと、京都大学の北部キャンパスの中に京大植物園（京都大学理学研究科附属植物園）があります。京大植物園を考える会では、植物園の存在価値を広く知らしめることを目的に、2003年から毎月一回の観察会を継続してきました。今年4月で丸四年となり、5月で通算50回目を迎えました。観察会は毎回一つテーマをとりあげ、研究者や専門家が解説するというスタイルで行ってきました。これまでにとりあげたテーマは植物、昆虫、きのこ、鳥、園内にある遺跡や活断層など多岐にわたります。四季折々、生き物や自然の様々な姿を観察することができ、毎回のように参加してくださるファンの方もいます。毎回30人以上の参加者がありますが、京大の学生・院生や教職員だけでなく学外からの参加も多く、約7割が大学周辺の地域住民を含む一般市民で占められています。

昨年度と今年度は、市民を対象とした環境教育講座、および大学構成員と市民との交流の場として、京都市京エコロジーセンターの環境保全事業の助成を受けて観察会を運営しています。今年度の活動では、参加者と主催者側のガイド、スタッフが協力して園内の植物の位置を地図に記入していく「京大植物園花と樹の地図づくり」という新しい試みを始めました。今年5月の観察会では、名古屋大学博物館の西田佐知子さんをガイドに、初めての地図づくりに取り組みましたので、その様子について報告します。

当日は、参加者を四班に分け、同時に植物園の白地図を四つのエ



リアに分割し、各班が一つずつ担当しました。「この白地図にはまだ何も記入されていません。植物園を歩くのが楽しくなるような地図を作ってみましょう」というガイドの声かけのもと、地図作りに取りかかりました。各班とも担当エリアの中で目印になる樹木や、現在花をつけている木や草の位置をシールや色鉛筆を使って記入していきました。植物の名前がわからない場合にはガイドや京大の大学院生らスタッフが対応しましたが、植物に詳しい参加者がうまい具合にどの班にも一人か二人いて、思いがけずスムーズに作業が進みました。いつもの観察会ではもっぱら聞き手に回っていたかもしれないこれらの方々にも活躍してもらうことができたのは、予想外の効果でした。

40分ほどで記入を終えて集合し、各班が記入した地図を一枚の大きなボードに貼り合わせて植物園全体の「花と樹の地図」が完成

しました。当日園内に咲いていた花の数は決して多くはなかったのですが、出来上がった地図は予想以上に充実したものとなりました。最後に各班の担当エリアの特徴や「みどころ」を紹介し合ってお開きとなりました。作業の成果をその場で共有することができるのが地図作りの楽しいところだと思いました。

次回の地図作りは秋ごろに行う予定です。そのときは花だけでなく「木の実の地図」もできるかもしれません。毎月の観察会の日程はホームページおよび京大北部キャンパスの今出川通り沿いの掲示板（理学部入り口付近に設置）でお知らせしています。ぜひ一度植物園を訪れてみてください。

（文責：京都大学農学研究科大学院生・坂本三和）

京大植物園を考える会

<http://members.at.infoseek.co.jp/bgarden/>

サロン中央アジア



この1カ月の間、中央アジア、特にカザフスタン共和国が日本の新聞紙上に連日のように登場している。この十数年間の中央アジアに関する全記事量を上回るほどの紙面の割きようである。甘利経済産業大臣を筆頭とする政府関係と経済界関係者の大代表団がウランと石油を買い付けるためにカザフスタンを訪問したからである。これ以前では、日本とカザフスタンがサッカーのワールドカップ戦出場をかけて対戦したときとソ連が崩壊して中央アジア諸国が独立したときだけである。日本のエネルギー政策を左右しかねるウラン買い付けのために小泉前首相が任期切れの1カ月ほど前に日本の首相としてはじめてカザフスタンを訪問し、その成果を踏まえての今回の大代表団派遣となったのである。金儲けとなると目の色を変えて、その国のことを十分理解しているかどうかなどお構いなしに出かけ、買いあさる日本の体質を如実に示している。

これで日本の原子力発電の燃料は確保され、多くの利権が小泉にも回されたことであろうし、電力

会社は「地球温暖化を防止するためには化石燃料発電から原子力発電へ」と大いにキャンペーンを展開するだろう。このことへの批判は、市民環境研究所の今年度の総会後に開催される小林丰二さんの講演で十分展開されるだろうから、ここでは割愛する。カザフスタンを始めとする中央アジア5カ国に関する情報は少ないし、日常的に市民の間で話題にされることはない。仮にあったとしても、それは「シルクロード・ロマンの旅」の対象国として、郷愁の国々として、ラクダを引いた隊商が歩いた地域として語られる。

私たちが「サロン・中央アジア」で語り合おうとしているのは、「郷愁のシルクロードの国々」だけでなく、「地下資源の国々」だけでもない。現代を共に生きる人々の住む「中央アジア諸国」である。そこには、我々と同じように、現代世界に共通の生きる喜びと苦しさを味わっている人々がいる。その世界を理解する日本人を一人でも多く作り出したいという思いから、このサロンを開設した。あえてサロンと名付けたのは、参加者

の資格は唯一つ、「中央アジアに関心がある」ことであり、中央アジアとの関係性がどのようなものであってもよいから、情報の少ないこれらの国々について、会話を楽しめればよいだろうと思ったからである。

サロンの提唱者である筆者は1990年から中央アジア、とくにカザフスタンとウズベキスタンの農業と環境問題の研究（アラル海環境問題）に従事してきた。研究者としての成果は日本カザフ研究会や現代中央アジア研究会を開催して発表してきている。しかし、研究者の活動領域は限定されたものであり、未だ未知の国々と表現した方が適当であるこれらの国々を理解するためには、商売でも、観光でも、支援であっても、これらの国々に出かけて行った経験のある人々との情報交換の必要性を感じたからである。

毎月第4木曜日の夕方6時半から市民環境研究所でサロンを開いている。時には多くの人が集まり、時には誰も来ないこともある。そんなことは意に介さずにいる。サロンとはそんなものだろうと思っているから、それほど宣伝もしていない。しかし、この場のおかげで多くの「中央アジア関心者」が知り合いになれたし、中央アジアから日本にきている人とも知り合いになれた。大いに成果が出ていると自画自賛している。ぜひ一度訪ねて来てください。金儲けのために目ざとく出かける日本人ばかりでないことを中央アジアの人々に知ってもらえれば十分と思っている。例会は毎月第4木曜日の午後6時半から市民環境研究所で。

(石田紀郎)

全学共通科目 環境科学基礎ゼミナール

4月、桜の季節になると大学は初々しい雰囲気にも包まれる。高校時代までの真面目さを“まだ”残し、緊張した顔つきで教室に入ってくる新入生たち。私は意地悪く、1人ほほえんでいる。「さて今年の1回生は、どのように“壊れて”いくのだろうか」。

新入生の大学に対する期待感の1つに、おそらく学問や科学に対する期待感がある。受験勉強から開放された直後の時期である。知的好奇心を満たしてくれ、社会や環境の改善に寄与できる学問に、ようやく接することができるのだ。そう期待する彼ら／彼女らに、私はゼミの前任者であった石田紀郎先生のセリフを繰り返すことになる。「環境問題に簡単な解決法はない」。一言で言えば、このセリフの重みをかみしめてもらうことが、本ゼミの目的である。もっとも、このような抽象的なセリフに耳を傾けてくれるのも1回生の4月だけ。だからこそ、このゼミを1回生前期に開講する意味がある。

このゼミでは興味あるテーマにもとづいて5～6名で班をつくる。そして班ごとに環境問題に関する資料を持ち寄り、フィールドワークを重ね、得られた知識や経験をもとに、議論を積み重ねていくというのが基本的なスタイルである。テストはない。その代わりに、夏がフィールドワークの期間となり、毎年、多くの班が見学や調査でフィールドに出かけていく。9月末には半年間で得た成果について発表会を開き、これで授業は終了となる。

ゼミの進め方は班ごとの自主裁量に任されることになる。環境問題についてであれば、何をどのよ



うに議論しても良いのだから、シンプルなゼミである。だが、このシンプルさが実はくせものである。「きれいな水って何?」「ゴミってリサイクルすればそれでいいの?」「環境教育って可能なの?」班員のなにげない一言が、たちまち議論のネタとなり、ひとしきりにぎやかな時間が過ぎる。やがて訪れる沈黙の時間……。

議論が楽しかったのも最初のうちだけで、やがて議論が苦痛にすらなる。何が自分たちの問題であり、何を自分たちは考えたいと思っていたのか、それすら混沌としてくるのだ。これが“壊れ”た状態である。こうなるともう立派なゼミ受講生である。科学や環境問題、さらには自分たちの能力に関して、幾重にも壁に直面し、それらを突破することがゼミでは重要なのである。

とはいえ、学生たちもタフである。秋にもなれば、こちらが驚くようなフィールドワーク経験を報告してくれることも多い。京都市内すべてのゴミ処理施設を見て回った班、小中学生に環境教育の授業をしてもらった班、自転車でも

津川の水質調査をしてもらった班……。このような学生たちは、ゼミ体験をその後のサークル活動などに活かすことも多く、先日「4年間、現場を見続けた」という学生の話の聞いて、頭の下がる思いであった。

時には珍騒動もある。夏休みに、ばったりと音信不通となり、9月末の発表会までも欠席した1君。福岡正信氏の自然農法に入れ込んでいた彼のことだから、きっと粘土団子で植林をしにギリシャに行ったのだろう、と班のメンバーは好意的に解釈し、彼を責めるようなことはなかった。その後、1君は単に大学を逃避していただけだったということが露見した。非難的となったことは言うまでもない。

ちなみにゼミの進め方は20年以上も担当された石田先生のやり方を踏襲している。ゼミをリフォームしたいとは思っているが、石田スタイルを乗り越えることは容易ではない。「エライもの(ゼミ)を残していかがはったなあ」というのが、正直な感想である。私もまた、学生に混じった悩める1人なのである。(大石和男)

里の前
だより

言葉以上の意味を伝えるもの

石田紀郎

当NPO法人を開始する以前から、農業ゼミなどで共に苦勞を重ねてくれた若者6人が大学院修士課程を修了し、それぞれの新しい人生に出発していった。市民研を去り、京都を去って大部分は東京に移り住んでいる。もちろん市民研の活動を支援してくれることには変わりはないだろう。現にホームページの更新は東京へ行ったNくんがやってくれている。インターネットが国中を繋ぎ、世界を繋いでくれているから情報の交換は便利である。どこからでも支援してくれるありがたさを感じているが、その反面、メールですべてを済ませようという風潮と現実

はきわめて危うい。メールの基本はお知らせ程度であり、双方の真意を交換するのは電話か面談であろう。肉声を聞き、顔を見て言葉以上の意味を伝えることの大事さを忘れてはいけないと自戒している。

市民研開所以来続けてきた「環境塾」も10シリーズを終了し、6月から第11シリーズが始まる。今回は新しい試みで塾を開始できた。というのは、これまでは事務局が企画実行してきたが、今回は市民研を会議などで使用している「火野山ネット」のメンバーが企画し開催してくれる。

前記のように事務局のメンバー不足の状態では願ったりかなったりである。今後も、利用団体や友好団体からの持ち込み企画に便乗させてもらえればありがたい。そのうちに、6人の若者が抜けた事務局の穴を埋め合わせる人材が登場するだろうし、市民研を大いに利用してくれる個人・団体の登場もあるだろうと楽観しながらこの場を維持し続けようと思っている。

BOOK REVIEW

「おもしろい！ 関西農業—その源流を探る—」

高橋信正・奥村英一（編）／昭和堂／2004年／1900円

農業に対する風向きが変わってきた。理由はバイオエタノールだ。オレンジジュースもマヨネーズも価格が上がるというから、広い範囲にわたって農産物の需要は変動しそうだ。とはいえ、はたして農業の復権や農民の生活向上に結びつくのだろうか。エネルギー産業に農産物を吸い上げられるのではなく、この強い風を地域農業発展に活かせる仕組み作りが急がれよう。

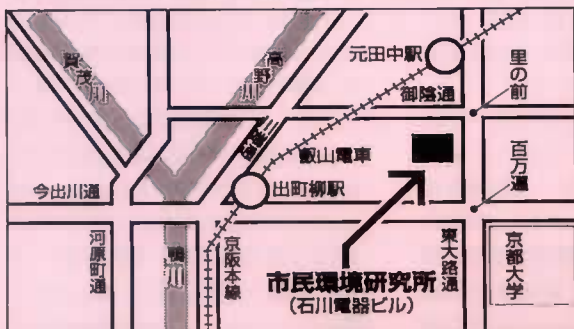
本書は元気印の農業を、関西という地域にこだわりながら取り上げた本である。たしかに関西にはおもしろい農産物が多い。京都の賀茂ナス

や泉州の水ナス、丹波の黒大豆、それに松阪牛のルーツでもある但馬牛など、<伝統>を活かした農業おもしろいのは農産物ばかりではない。もう一つの主役は、農業に携わる人間である。農業法人や集落営農組織では、農業をもちたてようとする意欲的で「おもしろい」お百姓が必ず存在する。重要なのは、地域資源を有する地元の協力をとりつけること、もう一つは、非農業の視点を導入することである。その意味では、新規参入者や非農家から嫁いできた女性のアイデアなどは貴重である。せっかく農業に寄せてきた上げ潮のチャンスをどう生かしていくのか、じっくりと考えてみたい。

「田舎のちから 一人／資源／環境／交流」

高橋信正・金澤洋一（編著）／昭和堂／2007年／2000円

前掲書の姉妹編といってもよい書である。地域にこだわる視点で、この書では「田舎」という言葉で表現する。ただし「田舎」とは、都会から取り残されたさびれた場所という、ネガティブな意味ではない。自然からもたらされる限りない資源をもち、地球環境を維持・向上させる機能をもち、人々の生活向上のベースとなる価値ある場所なのである。そしてこのような「田舎のちから」に気づき、クリエイティブな活動を展開している事例を20ほど取り上げたのが本書である。ここで感じられるのは、農業・農村は、もはや衰退産業・地域ではない、という事実である。新たに登場してきているのは、都市民の目から見た「異文化空間」としての「田舎」である。農山村の維持再生を声高く叫ぶのも良いが、自信をもって「田舎」の魅力を主張できる時代に入っていることにも気づいておきたい。（大石和男）



【年会費（1口）】

- 正会員（1口以上）
個人：5,000円、団体：20,000円
- 賛助会員（3口以上）
個人：1,000円、団体：10,000円

NPO法人 市民環境研究所
〒606-8227 京都市左京区田中里ノ前21 石川ビル305
Tel & Fax 075-711-4832
[E-mail] pie@zpost.plala.or.jp
<http://www.13.plala.or.jp/npo-pie/index.html>